

# 希少な日本産アコヤガイの保全と 天然採苗技術開発にかかる試験研究事業

藤原正嗣・田中真二・栗山 功・西川次寿

## 目的

日本在来の天然アコヤガイが生息する海域において、アコヤガイの保全を図りつつ、人工種苗生産に用いる稚貝を安定的に確保することを目的に、天然採苗技術を確立する。

## 方法

平成 29 年 7 月 7 日から 11 月 9 日まで、日本在来の天然アコヤガイが生息する県南部の湾に採苗器を設置した。採苗器はトリカルネットで作製した直径 5 cm、長さ 25 cm の円筒状の物 8 個をチョウチンカゴに入れたものを用いた。採苗器は湾奥部を起点に湾の南側沿岸 5 ヶ所（湾奥部から No.1～5）に等間隔で設置し、水深 0, 1, 2 と 3, 4, 5m に分けて垂下した（図 1）。

稚貝の付着状況の確認は 1～2 ヶ月毎に採苗器を引き揚げ、採苗器毎に目視により付着しているアコヤガイを計数した。

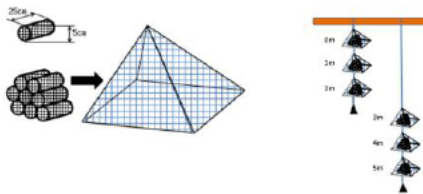


図 1. 採苗器と採苗器設置

## 結果及び考察

### ①第 1 回状況確認（8 月 22 日）

各定点の採苗器を目視により確認した。なお、付着しているアコヤガイの脱落を防ぐため、トリカルネット製の採苗器はチョウチンカゴから出さずに観察した。

全ての採苗器やチョウチンカゴでアコヤガイの付着は確認できなかった。

### ②第 2 回状況確認（10 月 12 日）

前回と同様に各定点の採苗器を目視により確認した。採苗器を設置した 5 地点のうち N0.1 を除く 4 地点でアコヤガイの付着が確認された。アコヤガイの付着数は 2～7 個、大きさは殻長 30～45 mm。アコヤガイが付着していた採苗器の水深はほとんどが 1m であった。

### ③第 3 回状況確認（11 月 9 日）

各定点の採苗器をチョウチンカゴから出してアコヤガイの付着状況を観察した。定点・水深別の採苗結果を表 1 に示した。全ての定点でアコヤガイは採取され、総採苗数は 42 個であった。定点別採苗数は N0.1 と No.5 が多く、No.2 が最も少なかった。水深別採苗数は 2m 層が 15 個と最も多く、次いで 1m 層の 11 個であった。なお、設置した 42 カゴ中 10 カゴにフタバベニツケガニが入っており、No.2 では 6 カゴ中 4 カゴに入っていた。フタバベニツケガニが入っているカゴはアコヤガイの採苗数が少ない傾向にあり、アコヤガイがフタバベニツケガニに食害された可能性が考えられた。

採苗されたアコヤガイの殻長は 6.5～60.1mm と大きさにバラツキがみられ、5～10mm と 25～50mm の貝が比較的多くみられた（図 2）。

今年度の試験では、湾の 5 地点全てでアコヤガイが採苗でき、アコヤガイの浮遊幼生が広範囲に分布していたと考えられた。水深別でみると 1～2m が稚貝の採取数が最も多かったことから、水深 1～2m に採苗器を設置することで効率良く稚貝を採取できると判断された。

表1. アコヤガイの付着状況結果

試験区	垂下水深(m)	アコヤガイ数	備考
No.1	0	0	
	1	2	
	2	5	
小計		7	
No.1'	0	0	
	1	3	
	2	8	
小計		11	
No.2	0	0	
	1	2	
	2	0	カニ1尾
	3	0	カニ1尾
	4	1	カニ1尾
	5	0	カニ1尾
小計		3	
No.3	0	0	
	1	2	
	2	0	
	3	0	カニ1尾
	4	2	
	5	0	カニ1尾
小計		4	
No.4	0	0	
	1	2	
	2	0	カニ1尾
	3	0	
	4	3	カニ1尾
	5	1	
小計		6	
No.5	0	3	
	1	0	カニ1尾
	2	2	カニ1尾
	3	2	
	4	2	
	5	2	
小計		11	
合計		42	

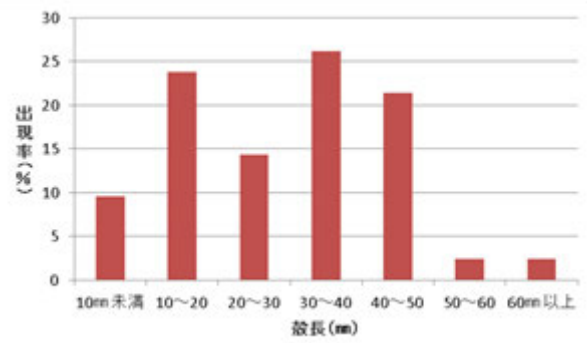


図2. アコヤガイの付着状況結果